

23. 箕島・臼島・ガロウ島

地 域 大村市箕島・臼島

交 通 県営バス 大村公園下車，大村波戸より箕島航送船

地形図 大村（1/50,000），大村（1/25,000）

長崎県の空の表玄関，新大村空港として建設予定地の箕島は，大村波戸場よりポンポン渡海船で30分程で到着できる。

箕島は周囲7 km，標高100 m以下のほとんど全島を，玄武岩が被覆している平坦な台地性の島である。海岸線は地質的にも地形的にも変化に富んだ地域である。島の最南端に小泊部落があるが，そこを中心に，以下特徴ある地点について述べる。

① 小泊南西部は肉眼的には淡青白色の粗粒の岩石で，1 cm大の斜長石の斑晶が目立ち，輝石の斑晶もかなり含まれている。顕微鏡下では填間組織をしめし，普通輝石・しそ輝石・かんらん石の斑晶をかなり含有している。石基には柏子木状の斜長石・微粒の普通輝石・かんらん石・磁鉄鉱が認められ，かんらん石しそ輝石普通輝石安山岩といえる。近くにはみごとな板状節理があり，節理面はN70° E からN70° Wに移化している。ガロウ島にも同質の岩石が露出している。

② 逆戻りして，最初の停泊地小泊より反時計廻りに海岸線をたどると，海水中の凝灰質細粒砂岩を角れき凝灰岩が被覆している。長与層群上部の平古場層との不整合であろう。

③ さらに数百 m歩いたところには，凝灰質の細粒砂岩に続いて中粒塊状の灰白色砂岩があるが，その間は明瞭でなく，むしろ判別に苦しむ擾乱帯がある。巡検会の時いろいろ議論に花がさいたが，松井和典・水野篤行の「大村図幅」に指摘された，平古場層と諫早層



箕島付近の地質図 (松井和典, 水野篤行; 5万分の1大村図幅による)

群上部毛屋層の断層帯であろう。時代的に非常に隔たりのある2層が同一水準にあるのだから落差の大きい断層に違いないし、垂直な崖でみられる小規模の断層とは全く異った珍しいものである。

④ 少し廻ると灰白色の中粒砂岩の中には、いたるところにサンドパイプが見られ、教材用として大きな岩塊が採集できる。

東海岸を一巡すると凝灰角れき岩あり、砂岩ありで複雑な地質である。玄武岩質凝灰角れき岩中には紡錘状の火山弾らしい岩塊もみられ、一種の集塊岩といえよう。その上部は箕島のほとんどを被覆している玄武岩である。また海岸線には海食崖もみられる。

⑤ 小学校裏の岩石を採集、肉眼的に観察すると灰濁色で1mm大の輝石が変質している。顕微鏡下では普通輝石、かんらん石と短冊状の斜長石の斑晶がよくわかり普通輝石かんらん石玄武岩である。

小学校近くの波止場より出航して白島にむかう。船上から見た多良の山も一興なものである。15分程で白島に上陸できる。

白島は南端の砂岩層と北部の多くをしめる安山岩からできている。南端の砂岩層は、走向N10°E、傾斜30°W、白色塊状中粒砂岩の

中にクロスラミナの発達したところもある毛屋層である。北部の安山岩は、第三紀層に岩脈状に貫入した岩体であり、その接触部は擾乱されてあまりはっきりしない。岩質はかなり風化されて新鮮な標本は得られないが、角せん石黒雲母石英安山岩である。斑晶の斜長石は累帯構造をしめしていて、角せん石は変質している。石英もかなり認められた。

大村湾の島めぐりも味わい深いものである。 (山本寿一)

大 村 湾

南北約25km、東西約12kmの大村湾は、針尾瀬戸（伊浦瀬戸）と早岐瀬戸の狭い水道によってわずかに外洋と通じている。この湾内の東岸は単調であるが、西岸には大串・形上・村松湾が、南岸には時津湾・長与浦・津水湾などの沈水海岸の特徴を示す細かな入江や岬がよく発達している。

大村湾は平均15～20mの深さで平坦な海底面が大部分を占めているが、潮流の激しい伊浦瀬戸の近くでは水深30m以上に溝状にえぐられて深くなっている。

湾流はゆるやかであるが反時計回りで、外洋水を混えた海水は西岸ぞいに南下し、湾の南部で東に向きを変えて東岸ぞいに北上する。したがって湾の中央部に固有水が存在し、夏は酸素が不足して無気帯をつくる。